金蘭会高等学校・中学校
校長　岡田　正次

令和３年度　学校経営計画及び学校評価

1　めざす学校像

建学の精神に則り、未来を生き抜くことができる資質・能力を培い、社会に貢献する自立した女性を育てる学校をめざす。本校では、「社会に貢献する自立した女性」を育成するために必要な資質・能力を、学力・協働性・主体性の３つと考える。この３つの資質・能力を構成する、『学ぶ力、考える力、解く力、認め合う力、行動する力（KINRAN　PRIDE)』を全ての教育活動を通じて育成する。

(1) 学力
① 学ぶ力＝生涯にわたり絶えず学び続けようとする意欲・姿勢
② 考える力＝習得した基礎的・基本的な知識・技能を、社会における様々な場面で活用できる力
③ 解く力＝習得した知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果を獲得するとともに、その成果を発信する力

(2) 協働性
認め合う力＝「ありのままの自分」を認め、他者の多様な個性や価値観、文化を理解し互いを尊重し人間関係をつくる力

(3) 主体性
行動する力＝自らの役割を把握し、その役割を果たすため、自リツ(自立・自律)的に行動する力

2　中期的目標

(1) 学校教育デザインの確立
① 学校教育デザインの具体化
全ての教職員は、「これからの社会に貢献する自立した女性」を育成する学校教育デザイン（めざす学校像・生徒に育みたい力）を具体化、共有化し、生徒・保護者に発信するとともに、日々の教育活動を見直し、生徒指導、学習指導を改善する。
② 「５つの力」の育成を実現する魅力的な学校づくりの推進
ｱ)グローバル人材の育成と近年強化していた英語教育の取り組みを活かした国際理解（ＧＳ）コースを設置する。
ｲ)学校教育デザイン（めざす学校像・生徒に育みたい力）に向けて現コースの成果と課題を検証し、コースのカリキュラム改編を含めコースの再編を検討する。
ｳ)中学部においても、その成果と課題を検証し、円滑な中高接続ができるように、カリキュラム改編を含め中学部の充実を図る。

(2) 学力の向上
① 学力向上策（基礎学力・学習習慣定着策）の実施
ｱ)教職員は自ら「学ぶこと」の重要性を理解し、それに基づいて教育活動を行う。
ｲ)多様な生き方を自分で判断し選択できる女性を育成するために、教職員は生徒に対して、「学ぶこと」の意味を理解させ、「学ぶ意欲」を喚起することで「自己効力感」を持たせる。あわせて、授業規律の確立、ICT の活用などで家庭学習の定着を図ることで、基礎学力の充実を図る。
② 授業力の向上
教職員の授業力向上を図ることで、すべての教科において、アクティブ・ラーニングを推進し、基礎的な知識や技能を活用し、論理的に考え、まとめ、発表する力を育成する。
③ 「総合的な探究の時間」のプログラムの確立
「総合的な探究の時間」(高校)・「総合的な学習の時間」(中学）のプログラムを確立するなかで、多様な人々・文化の出会いを通じて、コミュニケーション力、課題設定・課題解決能力を育成する。

(3) 進学実績の向上
① 3 年間・6 年間を見通した進路指導体制の確立
ｱ) 進路指導部は、各学年・教務部と連携し実力テストや模試等の客観的なデータを活用し、高校 3 年間を見通した進路指導体制を確立し、これからの社会で自立して生きていくために必要とされる、進路意識の醸成としっかりとした学力を育成する。
ｲ) 中学部は進路指導部と連携し、中高連携を図り、高校進学を含めた 6 年間を進路意識の醸成としっかりとした学力を育成する。
② キャリア教育の推進
これからの社会に貢献する自立した女性を育成するため、各コースは、金蘭会の強みである教育的リソース（大学、保育園、病院等）を活用したキャリアプログラムを確立し、社会で求められる女性の生き方、働き方を考える、３年間・６年間を見通したキャリア教育プログラムを策定する。
③ 千里金蘭大学・金蘭会保育園との連携
千里金蘭大学とのより効果的で密接な連携により、内部進学者を増加させる。

(4) 安全安心な学校づくりと自立・自律する力の育成
① 人間関係づくりの充実
各学年が、ＨＲや道徳、学校行事等を通じて、生徒一人ひとりが多様な生き方を自分で判断し選択できる女性に必要とされる、自分のすばらしさを認め他者を尊重し受け入れる豊かな心を育み、多様性を尊重し共生する力、自立・自律する力を育成する。
② 生徒の主体性の育成
生徒指導部は、生徒指導方針や学校行事の目的・意義を再確認し、多様な生き方を自分で判断し選択できる女性に必要とされる主体的に考え行動する力を育成する。
③ 支援が必要とされる生徒への対応
ｱ) すべての教職員は、「支援」という観点で日々の教育活動を見直す。
ｲ) 生徒支援委員会は各学年と連携して、発達特性や不登校傾向生徒への支援策を検討し実施する。あわせて、スクールカウンセラーだけでなく、外部の医療機関等との連携も強化する。

(5) 魅力的な学校づくりと機能的な学校運営の確立
① 募集広報活動の強化と体制の充実
本校がめざす新たな教育の魅力を全面的にアピールするため、保護者や受験希望者、中学校や塾等のニーズを把握し、評価と分析を徹底し効率的で効果的な募集広報戦略を立てる。
② ＰＤＣＡサイクルの徹底
各分掌・学年は、具体的なデータや根拠に基づいた総括や評価を徹底し、課題と方針を明確にする PDCA サイクルを確立する。
③ 組織運営体制の充実と教師力の向上
機能的な組織運営を図るため、職務の役割と責任を自覚する。計画的な人事計画のもと、適切な教員配置を実現する。また、外部教育機関等との連携を深め、教職員のスキルアップを図る。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析［令和３年実施分］	学校運営協議会からの意見
1) 学校教育デザインの確立 ・ 学校の教育活動について、保護者や生徒は引き続き満足をしている ・ 保護者・生徒からみると本校での 3 年間(6 年間)で身につけられる力(kinran pride)を育成する実践を充実させる必要がある。 「入学して良かった。」(保 92)・(生 92) 「他の学校にない特色ある教育活動に取り組んでいる。」(保 79)・(生 75) 2) 学力の向上 ・ 改善はみられるが、まだ保護者・生徒の授業満足度は低く、保護者・生徒に求める授業(生徒個々の力に応じた授業方法・教材)との乖離が大きい。「思考力・判断力・表現力」の育成など、生徒が主役の授業への改善が不十分である。 「授業は、わかりやすく楽しい。」(保 68)・(生 70) 「教材や授業方法の工夫・改善に努めている。」(保 75)・(生 70)・(教 85) 「参加体験型など、指導方法の工夫・改善を行っている」(生 44)・(教 65) 「自分の考えをまとめたり、発表する機会がある。」(生 70)・(教 55) ・ 今年度、家庭学習の定着、到達度の低い生徒への学習指導を課題として取り組んだ高校1年での学び直し(リメディアル)、中学部での取り組みが高く評価されている。今後、習熟度別指導や学び直し(リメディアル)などの取り組みをさらに進める。 「継続した家庭学習ができるようにしている。」(保 70)・(生 65)・(教 65) 「授業でわからないことについて、先生に質問しやすい。」(生 73) 「到達度が不十分な生徒の指導を全校的課題として取り組んでいる。」(教 45) 3) 安全安心な学校づくりと自立・自律する力の育成 ・ 生徒指導について、保護者・生徒との意思疎通が不十分である。指導の必要性・教育的意義をしっかり教員を含めた三者で議論する必要がある。特に、生徒については自分事としてしっかり考える力が必要である。 「学校の生徒指導の方針に、共感・納得できる。」(保 75)・(生 68) 「生徒指導において、家庭との連携ができている。」(教 85) ・ 昨年度に比べ、工夫して実施した学校行事に対して評価されている。ただ、生徒の主体的な活動という面では、不十分であった。生徒自治会中心に生徒主体の運営体制に移行する必要がある。 「行事は、積極的に参加できるよう工夫されている。」(保 83)・(生 78)・(教 65) 「生徒自治会活動は、自主的で活発である。」(保 72)・(生 66)・(教 45) ・ 生徒支援委員会を中心とした支援体制について、一定の評価を受けている。教員の評価が低く、人間関係づくり等に対する取り組みがまだ不十分さである。不登校生徒に対して、学校全体として組織的に支援する体制の構築など早急に取り組む必要がある。 「人権が尊重され安心できる環境づくり。」(保 76)・(生 73)・(教 60) 「保護者の相談に適切に応じてくれる。」(保 83)・(生 73)・(教 60) 「いじめについて真剣に対応してくれる。」(保 80)・(生 73)・(教 50) 「教育相談体制が整備されている。」(保 77)・(生 54)・(教 65) 4) 進学実績の向上 ・ 進路指導について、中学生に対して高校生の評価は低下している。「医療看護プログラム」など単発の進路行事だけでなく、中学部のように学年が核となり、進路指導部と連携した３年間(６年間)を通した、継続的・計画的な進路指導が必要である。 ・ 保護者からの評価が全体として改善がみられる。この要因として、進路勉強会等の進路指導部の取り組みの成果と考えられる。 「将来の進路や職業について考える機会がある。」(保 80)・(生 80)・(高 3 生 73)・(中学生 88) 「進路指導面できめ細かい指導を行っている。」(保 72)・(生 75)・(高 3 生 74)・(中学生 81) ・ 高1のコース別プログラムや、中学部の中大連携など千里金蘭大学との連携を進んだ。 「地域の幼稚園、大学や病院などと交流する機会をある。」(保 73)・(生 52) 5) 魅力的な学校づくりと機能的な学校運営の確立 ⑧学校教育への参画 ・ 高校の新システムより保護者の利便性と双方向性を実現したことへの評価と考えられる。来年度から中学部もに移行予定であり、システムのより効率的な活用、迅速で綿密な保護者対応が必要である。 「学校は、家庭連絡や意思疎通を積極的に行っている。」(保 79)・(高校 80)・(中学 78)・(教 80) ・ 校長の学校経営方針が明確に示され、教員に浸透しているが、教員個々の取り組みの共有が不十分な面が見られる。学年主任・分掌長のリーダーシップによる活性化が必要である。 「校長は教育理念や学校運営について考え方を明らかにしている。」(教 85) 「分掌・学年間の連携が円滑で有機的に機能している。」(教 20) 「会議の内容が、教育活動や学校運営に生かされている。」(教 55)	第1回 〇令和３年度学校経営計画及び学校評価について [学校より説明] 1.令和３年度学校経営計画及び学校評価の説明 2.キャリア教育の取り組みの現状報告 1) 「リメディアル」[高1]について 2) 『キャリア』[高1]について 3) 「総合的な探究の時間」[高 1]、進路学習の時間[中 3]、「総合的な学習の時間」における千里金蘭大学との中大連携[中 3、食育]について 3.GS（グローバルスタンダード）コースについて 1) オンライン国際交流について 2) GCED（地球市民教育）について 3) AW（アカデミックライティング）について [質疑] (委員)リメディアル教育に対して高校生対象であるが中学生に対する取り組みへの質問と充実に向けた要望があった。 (委員)今年度からの GS コースの留学費用に対しての質疑があり、「全員参加でなく希望性で実施、保護者負担も考え今後も継続する」と回答 (委員)他校の事例をみると進路指導室からキャリア（支援）センターに名称変更が多く目立つ、学びがモチベーションに繋がる場所として名称変更の提言があった。 (委員)コースが混在しているクラス編成のため土曜日になると各コースの特色がでる。その特色がよい刺激になり学力、課外活動の向上に繋がっている。高校1年は、新しい取組みが多い学年のため、新鮮な思いや戸惑いの思いを感じている部分もあるが保護者の立場として支援している。 (委員)学校やコースの魅力的な取組みについて、オープンスクール等を通じて外部に、また、在校生の保護者に対しても広報の強化をして頂きたい。 第２回 **〇令和３年度学校評価アンケートについて** **[学校より説明]** **1. 令和３年度学校評価アンケートの結果と分析について説明** **主に学力の向上・生徒の主体的な活動・進路実現・実績等について説明** 1) 授業改善に向けた取り組みについて 2) 学力意欲向上策について-高1リメディアル教育[国語・数学・英語基礎]、中学「学習ノート」 3) 3. 生徒の自治活動について **4) 進路指導について［質疑］** **(委員)アンケートでコロナ禍での状況がよく把握できた。しかし、重要な部分の結果の数値が下がっているが、これは受験者数にも比例しているのではないかと懸念している。基礎的な部分を固め基盤を作り進めてほしいと思っており、保護者の立場でこの結果は妥当であると感じている。** **(委員)教員の授業の工夫や学習指導面のマイナス結果について驚いている。他校との差別化の差が広がるのではないかと懸念している。** **(委員)学習指導要領改定について、観点別評価はアクティブラーニングからの評価につながるため、各教科の取り組みが必要である。**

3　本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1　学校教育デザインの確立	Ⅰ学校教育デザインの具体化 Ⅱ「５つの力」の育成を実現する魅力的な学校づくりの推進	a.　すべての教職員は、教科・学年・分掌において、「５つの力」（KINRAN PRIDE）の育成の実現に向けて、それぞれが具体的に「どんな力をつけてもらいたいか」を明確し、指導方針・取り組みを見直すとともに、自己研鑽に努め、教師力の向上に努める。 a.　すべてのコースは、それぞれの特色を明確にしたキャリアプログラムを企画し、長期休暇期間を利用し体験週間を実施する。 b.　すべてのコースは、カリキュラムの課題を明確にし、早期に学校設定教科・科目等の見直しを図る。 c.　中学部は、生徒の多様化に対応し、６年間を見通した、学習指導や生徒指導、キャリア教育を実施する。	●アンケート「満足度」 (保護者)95%［92%(20)］ (生徒)95%［91%(20)］ (教員)70%［59%(20)］ ●アンケート「特色ある教育活動」(保護者)90%［84%(20)］ (生徒)85%［78%(20)］ (教員)70%［52%(20)］ ●アンケート「教育方針の明示」(保護者)80%［76%(20)］ ●キャリアプログラム体験週間の実施	Ⅰ●「満足度」（保護者)92%(○)　(生徒)92%(○) ●「特色ある教育活動」(保護者)79%(○)　(生徒)76%(△) ●「教育方針の明示」(保護者)79%(○) ＊　保護者・生徒に対して、3 年間(6 年間)で「５つの力」(KINRAN PRIDE)を具体的に、実践の成果を十分に伝えることができなかった。(△) ＊　教科・学年・分掌が組織として、「５つの力」(KINRAN PRIDE)をどう育てるかという意思決定が不十分で、各組織間の連携も不十分であった。(△) Ⅱ●「満足度」(教員)75%(△) ●「特色ある教育活動」(教員)35%(×) ＊　千里金蘭大や他の大学等との連携で高1夏季特別プログラム(7月)、春期コース特別プログラム(3月)実施。外部団体との連携を含め、生徒主体の探究的な学習を実践できた。(○) ＊　到達度別の学び直しの取り組みは、基礎力の定着と達成感・充実感を残すことができたが、高1のみでは時間としては不十分で継続が必要である。(○) ＊　＊中３生対象高1授業体験(各コース独自カリキュラム)の実施を含め、中高大連携プログラムを実施した。(○)
２　学力の向上	Ⅰ学力向上策（基礎学力・学習習慣定着策）の実施 Ⅱ授業力の向上 Ⅲ「総合的な探究の時間」のプログラムの確立	a.　すべての教職員は協力して、教務部を中心に、授業規律の徹底を図り、家庭学習の指導を強化する。また、積極的に授業を改善し、基礎・基本の定着と主体的に学ぶ意欲を育てる。 b.　教務部が核となって、すべての教科において、主体的な授業(「参加体験型」・「考えをまとめ発表」等)へ改善する。 c.　教務部は、リメディアル授業の成果と課題を明確化し、全教員で共有化する。 d.　教務部は、進路指導部、GS コースと連携して学校設定科目『ＧＣＥＤ』、『ＡＷ』、『キャリア』の成果と課題を明確化し、全教員で共有化する。 e.　各教科・科目は、生徒、学力実態の推移を把握し、教科指導の課題を明確にして授業改善を図る。 f.　各学年は、教務部、進路部、教科と連携を図り、学力実態の推移を把握することで、学力向上策を実施する。 g.　教務部は、各分掌、学年と連携し学校行事の必要性を精査し、授業日数を確保する。12 月中に来年度の行事予定案を確定する。 h.　教務部は、オンライン授業の実施形態を確立する。また、各教科・科目は、コンテンツの充実を図る。 a.　教務部が中心に、研修を計画的に実施する。特に、先進校訪問や実践者による模擬授業など、実践的研修を実施する。 b.　ＩＣＴの活用をキーワードにした授業改善の推進を図るための相互の公開授業を継続的に実施する。(公開授業２回／年) c.　授業アンケート(7月・12 月)、自己診断アンケート(12 月)のデータに基づいて、総括を行い、具体的な改善計画を作成する。 a.　高校においては、高 1 を中心に、探究プロジェクトチームを設置し、中学部での成果や先進校の取り組みを参考に、キャリア教育の観点を含めてプログラム化する。 b.　中学においては、道徳などの成果を取り入れ、国際交流、伝統文化、食育の分野で、キャリア教育の観点を含め、プログラム化する。 c.　課題解決学習の実施やコース別学習の充実に向けて、系列校や卒業生(同窓会)を積極的に活用する。	●アンケート「授業満足度」 (保護者)70%［59%(20)］ (生徒)75%［68%(20)］ ●アンケート「授業改善」 (保護者)80%［73%(20)］ (生徒)70%［64%(20)］ (教員)90%［85%(20)］ ●アンケート「参加体験型」 (生徒)60%［45%(20)］ (教員)80%［82%(20)］ ●アンケート「考えをまとめ発表」 (生徒)75%［68%(20)］ (教員)70%［63%(20)］ ●アンケート「習熟度別指導」 (生徒)75%［66%(20)］ (教員)50%［26%(20)］ ●アンケート「家庭学習定着」 (保護者)80%［73%(20)］ (生徒)70%［62%(20)］ (教員)70%［63%(20)］ ●アンケート「ｷｬﾘｱ教育」 (保護者)85%［78%(20)］ (生徒)85%［78%(20)］ (教員)65%［56%(20)］ ●アンケート「生き方を考える」(保護者)85%［76%(20)］ (生徒)70%［62%(20)］ (教員)80%［74%(20)］ ●授業公開と研究協議会の開催 ●外部講師による研修	Ⅰ●「授業満足度」(保護者)66%(○)　(生徒)70%(○) ●「授業改善」(保護者)75%(○)　(生徒)71%(○)　(教員)85%(○) ●「参加体験型」(生徒)44%(×)　(教員)65%(×) ●「考えをまとめ発表」(生徒)71%(△)　(教員)55%(×) ●「習熟度別指導」(生徒)74%(○)　(教員)65%(○) ●「家庭学習定着」(保護者)71%(△)　(生徒)65%(○)　(教員) 65%(○) ＊　新学習指導要領実施に向け、教務部を中心に検討を進め、評価、評定の見直しについての合意形成がなされた。(○) ＊　教科会議において、評価・評定の見直しに向け、指導方法の検討を行った。(○) ＊　従来型授業からの更なる脱却向け至急に授業改善が必要である。(△) ＊　家庭学習の定着、到達度の低い生徒への学習指導として、。国・数・英の学び直し(リメディアル)[高1]、を、中学部取り組みを実施したことが生徒に高く評価されている。(○) ＊　習熟度別指導や学び直し(リメディアル)について、全校的に改善する必要がある。(△) Ⅱ●『観点別学習状況の評価とそれに向けた学校の取組みについて』(講師：大阪府教育センター　植木信博先生)8/24(火)実施(○) ＊　研修を受け、各教科において、育成したい力の明確化、評価・評定の見直しに向け、指導方法の検討を行った。(○) ＊　授業公開並び互見授業等を実施することができなかった。(×) Ⅲ●「参加体験型」(生徒)44%(×)　(教員)65%(×) ●「考えをまとめ発表」(生徒)71%(△)　(教員)55%(×) ●「キャリア教育」(生徒)80%(○)　(教員)50%(×) ●「生き方を考える」(保護者)77%(△)　(生徒)65%(○)　(教員)60%(×) ＊　高1においては、「総合的な探究の時間」のプログラム化がすすめられた。(○) ＊　高1・2の思春期講座、中３総合的な学習の時間(Kinranファーム)における食育分野において、中高大連携プログラムを実施した。(○)

３ 進学実績の向上	Ⅰ３年間（６年間）を見通した進路指導体制の確立	a.　すべての教職員は協力して、進路指導部を中心に、授業や総合的な探究の時間、学校行事、部活動を通じて３年間（６年間）で培った、学力と人間力を活かし、ＡＯ等の推薦や一般など様々な入試にチャレンジする生徒を育成する。 b.　進路指導部は、関係分掌、学年、教科等が連携を図り、卒業までの３年間（６年間）を見通した指導計画を作成する。 c.　進路指導部は、指導計画に基づいて、進路ＨＲ(月１回)、練成授業(講習)や勉強マラソン(年３回)等の進路行事、進路面談を実施する。 d.　進路指導部は、教務部・教科と連携して、「練成授業(講習)」、「キャリア」、リメディアル授業の成果を受けて、主体的に学習するできるように、授業改善を図る。	Ⅰ●アンケート「進路指導(連携)」 (保護者)75%[68%(20)] (生徒)80% [74%(20)] (教員)75%[70%(20)] ●アンケート「進路指導(取り組み)」(保護者)90% [85%(20)] (生徒)80% [71%(20)] (教員)75%[70%(20)]	Ⅰ●「進路指導(連携)」(保護者)72%(◯)　(生徒)75%(◯)　(教員)65%(×) ●「進路指導(取り組み)」(保護者)79%(×)　(生徒)71%(◯)　(教員)60%(×) ＊　「勉強マラソン」・「集中講座」、全国模試返却会等の進路行事を計画とおり実施でき進路意識の醸成としっかりとした学力の育成につなげた。(◯) ＊　進路指導部主導で各教科と連携し、実力テスト等の結果と紐付けて基礎学力向上に向け、デジタル教材の活用など教材の改善を図った。(◯) ＊　進路指導体制について、進路行事だけでなく日常的にホームルール等を活用した指導を強化するうえで学年が核となり、進路指導部と連携した継続的・計画的な進路指導が必要である。(△) ＊　高１における「総合的な探究の時間」、「キャリア」の取り組みは、学年と進路をつなぐ重要な実践である。
	Ⅱキャリア教育の推進	a.　進路指導部は、3年間(6年間)を見通し、適性や職業について考えるキャリア学習を系統的に実施する。総合的な探究の時間と連携して行う。 b.　各コースは、大学、幼稚園・保育園、病院等外部と積極的に連携し、長期休業中を利用し、コース独自のキャリアプログラムを実施する。 c.　中学部については、ＨＲや道徳の時間を活用し、働くことや職業・進学を考えるキャリア学習を系統的に実施する。 d.　高校生との交流を通じて、高校の各コースの特徴を伝え、高校での円滑なコース選択(内部進学)を促す。 e.　保護者対象の進路説明会(学期１回)を実施し、保護者の進路意識の醸成に努める。進学・就職・公務員など各進路の情報、入試制度や進学費用等についての理解も深める。	Ⅱ●アンケート「キャリア教育」 (保護者)85% [78%(20)] (生徒)85% [78%(20)] (教員)65% [56%(20)] ●アンケート「生き方・将来を考える」(保護者)85% [76%(20)] (生徒)70% [62%(20)] (教員)80% [74%(20)] ●コース独自キャリアプログラムの実施 ●保護者対象の進路説明会(学期１回)実施	Ⅱ●「キャリア教育」(保護者)80%(○)　(生徒)80%(○) ●「生き方・将来を考える」(保護者)77%(○)　(生徒)65%(○)　(教員)60%(×) ＊　高１夏季特別プログラム(文理進学４講座、子ども教育１講座、看護医療１講座、アスリート１講座)を実施した。(○) ＊　看護医療コースでは、社会で貢献する女性を育てるプログラムを策定し実施した[７月：チーム医療（森ノ宮医療大学）・３月心肺蘇生法と防災医療・AED講習（神戸国際大学）]。(○) ＊　中３「総合的な学習の時間」において千里金蘭大学栄養学科との連携授業[食育について]を実施した。(○) ＊　「保護者対象進路勉強会」は３回[７月 24 日(15 名参加)・11 月 27 日(17 名参加)・２月 26 日(11 名参加)]実施した。進路指導部の保護者への情報発信の成果とである。(○)
	Ⅲ千里金蘭大学・金蘭会保育園との連携	a.　大学への内部進学率 20%以上をめざす。 b.　各コースにおいて、高大連携を強め、出張授業や大学での体験授業・金蘭会保育園での実習を実施する。 c.　特に看護・食物栄養・児童保育系の志望者について、高１より必修の説明会を実施する。 d.　キャリア教育を推進するうえで、生徒のロールモデルとして、ＯＧや同窓会と積極的に連携する。	Ⅲ●アンケート「大学等との連携」 (保護者)70% [64%(20)] (生徒)60% [52%(20)] (教員)95% [89%(20)] ●千里金蘭大学説明会実施回数 ●千里金蘭大学への内部進学者 20%以上 [29 名、19%(20)]	Ⅲ●「大学等との連携」(保護者)69%(×)　(生徒)52%(△)　(教員)45%(×) ●千里金蘭大学への内部進学者 16 名、19%(△) ＊　千里金蘭大学への内部進学は 16 名、中学からの高校内部進学率が３分の２以上であった。(△) ＊　高１「キャリア」・「総合的な探究の時間」、中学部の食育など、キャリア教育の視点で継続的な中高大連携プログラムを確立する必要がある。(△)

4 安全安心な学校づくりと自立・自律する力の育成	Ⅰ人間関係づくりの充実	a. すべての教職員は協力して、生活指導部を中心に、すべての教育活動を通じて、自尊感情と他者尊重の意識(多様性の理解)と、学校生活に主体的に参画する意識を培うことで、社会で自立(自律)して活躍できる人間力を育成する。 b. 各学年は、ＨＲだけでなく道徳(中学)や「総合的な探究の時間」、学校行事を活用し、学年の人間関係づくりの方針を明確にする。 c. 保護者との連携を強め、人間関係上のトラブルやその他の問題を早期にキャッチし、解決に向け生活指導部や生徒支援委員会、いじめ対策委員会と連携する。 d. SNS の関わる問題など、生活指導上の課題については外部機関との連携し、系統的に指導を行う。	Ⅰ●アンケート「人権教育」 (保護者)80% [74%(20)] (生徒)70% [64%(20)] (教員)65% [56%(20)] ●アンケート「安心安全な環境」(保護者)80% [74%(20)] (生徒)80% [71%(20)] (教員)90% [85%(20)]	Ⅰ●「人権教育」(保護者)77%(○) (生徒)65%(○) (教員)30%(×) ●「安心安全な環境」(保護者)76%(○) (生徒)73%(○) (教員)60%(×) ＊ 多様性を認めるクラス・学年集団づくりが不十分であるため、人間関係(教員と生徒、生徒間、教員間)が個々の対応となった。(×) ＊ 中３の道徳の実践の成果を活かし、各学年が生徒指導部と連携し、早急に３年(6年)間を見通し、ＨＲ計画を検討する必要がある(△)。 ＊ り支援の必要な生徒については、学年、生徒支援委員会が連携し、具体的な支援計画を作成した[中３生１名、高１生１名に](○)
	Ⅱ生徒の主体性の育成	a. 生徒の多様化に対応して、生活指導方針について教職員間(学年・分掌)での共有化を図り、生徒の内面に迫る(人権教育の観点に立った)生徒指導が行う。 b. 「体育祭」・「蘭祭」・「校内競技大会」の学校行事の目的・意義を確認し、実施形態や時期など、生徒自治会を中心に生徒主体の運営を実施する。	Ⅱ●アンケート「生徒指導方針」 (保護者)80%[75%(20)] (生徒)80% [73%(20)] (教員)70% [63%(20)] ●アンケート「方針への共感」 (保護者)85% [79%(20)] (生徒)75% [66%(20)] (教員)90% [85%(20)] ●アンケート「学校行事」 (保護者)90% [82%(20)] (生徒)80% [75%(20)] (教員)80% [74%(20] ●アンケート「生徒自治会活動」(保護者)75% [66%(20)] (生徒)75% [66%(20)] (教員)65% [59%(20)]	Ⅱ●「生徒指導方針」(保護者)79%(○) (生徒)73%(△) (教員)55%(×) ●「方針への共感」(保護者)76%(×) (生徒)68%(○) (教員)75%(×) ●「学校行事」(保護者)83%(○) (生徒)79%(○) (教員)65%(×) ●「生徒自治会活動」(保護者)73%(×) (生徒)66%(○) (教員)45%(×) ＊ 生徒指導について、指導についても、保護者・生徒との意思疎通が不十分で、特に生徒層の変化に対応して、腑に落ちていない点も残しながらの指導となっている。指導の必要性・教育的意義をしっかり理解し改善することができる指導に改善する必要がある(△) ＊ 昨年度に比べコロナ禍でのなか、工夫して実施した学校行事に対して評価されている。ただ、当事者である生徒の意見を十分反映できていない。生徒自治会中心に生徒主体の運営体制に移行する必要がある。(△)
	Ⅲ支援が必要とされる生徒への対応	a. 各学年は、配慮・支援を要する生徒や課題のある生徒のリストアップを図り、学年会議で状況と情報を共有する。 b. 必要に応じて、ＳＣをはじめ専門家、外部機関(医療機関・福祉機関)や、出身中学など連携する。 c. 生徒支援委員会は、支援を要する生徒に対する支援策を学年に提案する。また、校務連絡会や職員会議に報告全職員で情報と支援策の共有化を図る。 d. 各学年は、障がいにより支援が必要な生徒に対して、生徒支援委員会と連携して、個別の教育支援計画を作成する。 e. 生徒支援委員会は、学習支援策を充実させるため、オンライン授業の活用を含めた教務内規の検討を、教務部と進める。	Ⅲ●アンケート「いじめへの対応」(保護者)85% [78%(20)] (生徒)75% [70%(20)] (教員)85% [78%(20)] ●アンケート「教育相談体制」 (保護者)85% [77%(20)] (生徒)65% [60%(20)] (教員)95% [89%(20)]	Ⅲ●「いじめへの対応」(保護者)80%(○) (生徒)73%(○) (教員)50%(×) ●「教育相談体制」(保護者)77%(△) (生徒)55%(×) (教員)65%(×) ＊ 各学年より支援の必要な生徒についてリストアップし、職員会議で共有化する。(○) ＊ 本年度より SC1 名増員により、支援を必要とする生徒・保護者に対応が可能となった。(○) ＊ SC との連携が対担任・学年となり、委員会として共有が不十分であった。(△) ＊ 不登校生徒対象の学習支援の体制が確立しことで、教室復帰や学習保障の道筋ができた。(○) ＊ 担任や学年が抱え込むことなく、全校的にかかわることが可能となった。(○)

５魅力的な学校づくりと機能的な学校運営の確立	Ⅰ募集広報活動の強化と体制の充実	a.　すべての教職員は協力して、あらゆる教育活動において改善を進めることで、生徒の学力と人間力を育成することで「生まれ変わった金蘭会」を実現するとともに、募集広報部を中心に、その「生徒の姿」を地域、中学校等に発信する。 b.　募集広報活動を学校全体での取組みとする。募集広報部の動きや方針の「見える化」を図り、全教職員での共有化する。 c.　「生まれ変わった金蘭会」をわかりやすく伝えるため、広報イベントの改善、ホームページの充実、効果的な案内パンフレット、他のメディアの活用を図る。 d.　全教員による出前授業やイベント時の体験授業などのメニューを開発し、「生まれ変わった金蘭会」を広報する。	Ⅰ●中学校ｵｰﾌﾟﾝｽｸｰﾙ参加数 各回 50 組以上 ●中学校入試説明会参加数 各回 50 組以上 ●高校ｵｰﾌﾟﾝｽｸｰﾙ参加数 各回 100 組以上 ●高校入試説明会参加数 各回 100 組以上	Ⅰ ＊　中学入学生[10 名減]、高校入学生校[19 名増]、高校は昨年度より少し持ち直した。 ＊　高校入試では、進路相談をする中学校が増加。入試制度や支援制度の改善がアピールできた。(○) ＊　中学入試では、進路実績やリメディアルなど、「変わった金蘭会」を十分に塾・保護者に伝えきれていない。(×) ＊　生徒ボランティアスタッフの活用、、パンフレットやホームページの見直し、分かりやすく一体感のある広報イベントの改善を行った(○)。 ＊　全教員による広報活動は不十分で、アピールできる教育内容を十分伝えることかできなかった。(×) ＊　従来の広報戦略を全面的に見直し、戦略的な広報活動を行う組織が必要である。(△)
	ⅡPDCA サイクルの徹底	a.　各教職員は、授業アンケート(7 月・12 月実施予定)結果をもとに、具体的な改善点を明確にし、各期に「授業改善報告書」を提出する b.　各分掌・学年・教科は、自己診断アンケート結果を分析し客観的に年度総括と次年度の方針を設定する。 c.　有識者(千里金蘭大学より人選)を含めた、将来構想委員会を設置し、高大連携を強化するとともに、本校の将来像を検討する。	Ⅱ●学校運営協議会の実施 ●自己評価アンケート結果と学校運営協議会評価のホームページ公開	Ⅱ ＊学校運営協議会を 2 回実施した(△) ※自己評価アンケート(12 月)の結果を学校運営協議会(3 月)に報告した(○)。
	Ⅲ組織運営体制の充実と教師力の向上	a.　各学年や他分掌の連携を強め、主任・分掌長がリーダーシップを発揮できる体制づくりを推進する。 b.　学識経験者や他校における実践者等の招くなど、効果的な研修を実施し、授業改善を図る。 c.　女性の自立に向けて、直面する教育課題に対応した実践的な研修を実施する d.　初任者や経験年数２～３年目の若手教員に対しては、外部研究団体の研修等を活用し教員育成を図る。	Ⅲ●教職員研修の実施 ●若手対象教職員研修の実施回数 ●教職員アンケート 「教員間連携」60％［48％(20)］ 「会議運営」60％［52%(20)］ 「計画的な研修」70％［63%(20)］ 「若手教員の育成」50%［26%(20)］ 「校外研修」60%［33%(20)］	Ⅲ●「教員間連携」20%(×)　「会議運営」55%(○) ●「計画的な研修」55%(×)　「若手教職員の育成」20%(×)　「校外研修」25%(×) ●「授業改善研修(観点別学習状況の評価)」[8/24]　「特別支援教育(個別の支援計画)[7/24] ＊　校長の学校経営方針が明確に示され、教員に浸透しているが、教員個々の取り組みが孤立し、個人と管理職(企画)とのやり取りとなり、学年・分掌発信になっていない。学年主任・分掌長のリーダーシップで、学年・分掌が核にならなくてはならない。(△) ＊　今年度は直面する課題について、学識経験者等の招いた研修を実施した。(○) ＊　系統的・組織的な教員育成体制（計画的研修〈校内研修・外部研修〉の実施が必要(×)